

日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究

埋蔵文化財センター

わが国出土の考古遺物の源流は、その大勢を韓国に求めることができる。それらは、大陸から舶載されたり、あるいは製作技術のみが伝播したものである。なかには、材料そのものが日本に伝えられ、日本で製作された遺物もあるといわれている。本研究では、こうした考古遺物の材質分析やその製作技術に関する研究成果を見直して、改めて両者間の考古遺物の比較検討を試みた。この種の分析に際しては、大半の遺物が、すでに劣化しているために正確な分析値が得られないという欠点があった。しかしながら、わが国と韓国の気候・風土はきわめてよく似ており、遺物の埋蔵環境も類似し、遺物の劣化状況には共通するところが多い。そのため、材質分析に際しても、この劣化の程度を正確に把握することによって、材質分析の精度を高めることができる。あるいは、分析結果を相対的に比較検討することも可能である。本研究は、考古学研究のみならず、遺物の科学的保存処理のための情報をも提供することを目的とした。

青銅器に関しては、銅成分に対する錫・鉛の含有量比に着目して測定し、さらに微量成分の銀・砒素・亜鉛・鉄などの含有量を検討したが、顕著な差異はみとめられなかった。なお、今回の数多くの資料収集のなかで、韓国における金製遺物の出土量がわが国の比ではないことをあらためて認識させられた。

そのほか、大型の木製遺物、とりわけ、海底出土の船体保存や石像文化財の保存技術に関する問題が詳細かつ具体的に議論された。また、古代の顔料の分析などに関する研究を行った。なかでも、漆製品の分析研究では、両国における出土漆製品の断面の薄片を作成し、顕微鏡的な観察をもとに製作技術や使用材料に関する比較を試みた。漆に混ぜられた顔料、漆を塗り重ねたときの塗り回数、下地の挟雑物の材質などに関しては、両国間に共通する部分が非常に多いことがわかった。その技法的な類似性については、韓国と時代的なズレがみとめられ、大陸からのこの種の技術の伝播経路を研究する上で有益な資料を得ることができた。木胎に漆を薄く塗る技法があるが、それは中国では戦国時代にみられるものである。一方、日本では弥生時代にみられる。また、漆の下地に動物の骨を焼いて粉碎したものを混ぜている例が数多くみられる。中国では漢代の製品に、韓国では7世紀の製品に確認されている。日本では、奈良時代の製品に骨粉が確認されている。資料数に乏しく、定かではないが、一時代遅れてその同等製品が日本に出現しているように思える。

金属製遺物に関しては、分析調査の資料数を増やしたうえで、器種ごとに、そして時代別に比較していく必要が生じた。出土木材の分野では、両国でPEG含浸法が盛んに実施されており、今後の継続的な経年変化の比較観察が必要である。すでに、木材内部におけるPEGの凝固時の形態変化などの基礎的な調査にもとづく観察を確認しあっている。今後、各種材質に関する分析と保存について、より厳密な比較研究をおこないたいと考えている。